

1 復活祭

今日は復活祭(イースター)です。イエス・キリストの復活、死人のうちよりの甦りを記念する日です。

復活祭が、降誕祭(クリスマス)、そして聖霊降臨祭(ペンテコステ)とともにキリスト教の、あるいは教会の、もっとも大切な祝祭であることは、いうまでもありません。どれが一番大切かということではなくて、この三つが一つとなつて、キリスト教の骨格がつくられています。

思えば、イエスの降誕(誕生)は、まことに密やかな、静かなものでした。母マリアのほか、誕生に立ち会ったのは父ヨセフと、そこにいた牛やロバなど、わずかな家畜だけでした。時は夜でした。

これに対しイエスの復活、甦りは、様子が違います。時は早朝です。葬られた墓の中で何が起こったか、その出来事そのものは、だれにも分かりません。しかしイエスの復活のことは、イエスのご降誕の時とは違って、すぐに、大きな波紋を広げて行ったのです。

波紋は、さし当たり弟子たちをとらえ、イエスをキリスト(メシア)、救い主として告白する、確かな信仰をつくり出します。それを宣べ伝える教会の誕生には、なお聖霊降臨を俟たなければなりませんでしたが、復活によって弟子たちの信仰が強められ、確かなものとされたことは、間違いありません。こうしてイエスの復活が始まりとして、やがて教会が誕生することになります。

しかしそこに至るまでいくつかの段階があるように思います。それを、私なりに整理すれば、三段階です。最初は、イエスの復活直後の、いろいろの出来事です。次いで、復活から「四十日」間の出来事があります。「使徒信条」でいうと、「三日目に死人のうちよりよみがへり」のあと、「天に昇り」までの間のことです。この間「四十日」あったのです。聖書には、この間の印象深い、多くの出来事が伝えられています(使徒言行録一・三参照)。

第三段階は「使徒信条」にいう「天に昇り」以後のことです。天に昇り、ですからイエスは地上にいません。代わりに聖霊が与えられます、教会が誕生し、宣教が開始されたのです。

この第三段階のことは、今日のペトロの手紙一を取り上げるときに、触れることになりませんが、まずは、第一、第二段階、イエスの復活と、それにつづく「四十日」のことを申し上げます。

まず、第一段階です。イエスが埋葬されたのは、十字架上で死んだ日、金曜日の日没前です。日が暮れると安息日、埋葬はできません。

三日後、安息日が明けます。日曜日の朝です。マルコによる福音書によれば(一六章)、イエスの埋葬を見届けた何人かの女性たち、「マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメ」が遺体に油を塗るために墓に急ぎます。朝、ほんとに早くです。彼

女たちの心配は、蓋の代わりに墓の入り口に置かれた石です。はたして除けることができるだろうか、互いに話しながら墓に行ったとあります。

ところが、墓に近づいて目を上げると「墓は山腹に掘られた横穴」、石が転がしてあったということです。墓穴は開いていました。

女たちは墓に入ります。そこにイエスの遺体はありませんでした。その代わり、一人の若者、天の使いがいて、イエスの遺体の置かれていた場所を指差し、イエスは復活したと告げたのです。墓の中にイエスの遺体が無かった。天使は、イエスは復活した、神によって甦らされたと告げたのです。

それから天使は女たちに、復活のことを、ペトロもふくめ、弟子たちに告げるように命じます。しかし彼女たちは、恐怖に襲われ、正気を失い、弟子たちに伝えることをしませんでした。ルカでは（二四章）少し違って、墓から帰って来て弟子たちに伝えたことになっています。これを聞いて、みな信じなかった中で一人ペトロだけは、立ち上がり、墓へ走って行き、遺体がないことを見て、驚きながら家に帰ったとあります。

2 教会の基礎

以上のイエスの復活の第一段階は、結局、弟子たちは、信じなかった、信じられなかったということと終わっています。

彼ら弟子たちは、イエスから、生前、何度も、十字架のことも、三日後に復活することも聞かされていました（ルカ九・二二他）。しかし、いざそれが現実になったいまこの時、それは、恐ろしいこと、ありえないこと、信じられないことでしかなかったのです。

しかしこの時の弟子たちは、それ以上に、虚しい思いの中に沈み込んでいた、元気をなくしていたのではないかと思えます。イスラエルを救ってくださるのはこの方だと望みをかけていたのに（ルカ二四・二一）、その希望は、イエスの死によって潰（つい）えてしまったからです。まさにこうした重い空気を打ち破ったのは、聖書によれば、復活のイエスご自身であったのです。

復活したイエスご自身が、弟子たちに、ご自分を、現（あらわ）したからです。聖書は、それをこの決まった言葉、「現れた」という言葉で語っています。復活者の顕現（けんげん）です。

彼らの目の前にイエスは立っています。生きたお方としておられます。復活といえば復活、甦りといえば甦りです。こうして生きておられる、それはまさに疑いようがないのです。

今日は福音書をていねいに思い起こすことはいたしません。しかし、皆さん、例えばルカによる福音書二四章、エマオ途上の出来事を思い出してください。エマオ村に向かう二人の弟子、途中イエスがいつの間にか同行します。そしてこの方がイエスだと彼らに分かったのは、イエスがパンを裂く仕草からでした。イエスの「現れ」として思い起こしていただきたい場面の一つです。

あるいはイエスの弟子トマスのことともそうです。イエスが弟子たちのところに来て

くださったとき、彼はそこにいなかった。一週間後、そのトマスに、イエスはもう一度現れ、自分の手の釘の跡、脇腹の槍の跡を示し、自分が十字架にかけられたイエスであることを示します。トマスは不信を悔い、「わたしの主、わたしの神」（ヨハネ二〇章）と告白します。

こうして「現れ」たことが、すべての出発点であったことを、使徒パウロはコリントの信徒への手紙一（一五・四〜八）にこう書いています。

聖書に書いてあるとおりに三日目に復活したこと、ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたにしろ、大部分は今なお生き残っています。次いでヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

「ケファ」とは、ペトロのことです。最初にペトロに、そして最後に私のような者にまで現れてくださったと、その恵みをパウロは告白しています。

一つ注意したいのは、「現れた」のは、みな使徒たち、弟子たち、そしてイエスを信じ従ってきた人たちだけであったことです。「現れ」たのは、外部の人にはなかったのです。そういう人に、たとえ「現れた」として、果たして、イエスだと分かったのでしようか。分かったとして意味があるのでしょうか。信じ従ってきた人たちであったればこそ、あのイエス様が、来て下さった。死の向こうから、すなわち、死を乗り越えたところから、命から、この世界へと来て下さったと知るのです。ですからこの「現れ」とは、その人にとって、特別な出会い、特別な体験以外のものではないのです。そしてこの出会いの意味を深く悟るところから、イエス・キリストとはだれか、十字架と復活の意味、人の救い、信仰と希望、すなわち、教会が宣べ伝えるすべてのことが明らかにされることとなります。かくてキリスト教信仰がとのえられ、教会の基礎が築かれることとなります。

いままし申し上げたように、復活のイエスの「現れ」は、それぞれの人にとって人生の变革を意味していました。三度までもイエスを否んだペトロも、生まれ変わりました。使徒パウロも生まれ変わりました。イエスの復活とは、何か科学によって証明されるようなことではなくて、私どもの信仰によって、私ども自身の生まれ変わりによって証しされる事柄なのです。

3 生ける希望

さて、イエスの復活から教会の形成へ、その第三段階です。イエスは天に昇り、地上にはいません。

ペトロの手紙は、この時期のものです。手紙が宛てられているキリスト者たちは次のように描かれています。

あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、

言葉では言い尽くせない素晴らしい喜びに満ちあふれています（八節）。

ペトロが書いているのは、かつても、いまも、イエス・キリストを見たことのない人たちです。時代は新しくなっています。しかしそのあなたたちも、現にいま、すばらしい喜びに満ちあふれている、そしてその喜びをもたらしているのは、イエス・キリストの復活にほかならないのだということです。それゆえ今日の聖書はこう書いています。

わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、またあなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しぼまない財産を受け継ぐものとしてくださいました。あなたがたは、終わりの時にあらわされるように、準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています」（三～五節）。

イエス・キリストの復活、それはひとりイエス自身のためだけのものではありませんでした（Ⅰコリント一五・一五以下）。私どものためでもあったのです。イエスを見たことのない、今も見えていない人のためでもあるのです。

かつてペトロが、そしてパウロが、復活のイエスに出会って、生まれ変わり、人生の転換を経験したように、私どもも「新たに生まれ」させられるということです。よく使われる言葉でいえば、「新生」です。

今日の聖書の言葉は、この私どもの新生は、じつにイエス・キリストが甦ってくださったことに基づいているということです。神はイエスを、罪とその咎（とが、処罰）としての死の世界に捨て置かれず、神の命に生かされたということ、そのことが私どもにおいても起こるのである。

新生、神の命に新しく生かされるとは、決してたんに心機一転、気は持ちようで新しく決心し直せばいいというものではありません。人間の決心がいかに当てにならないか私どももみなよく知っています。

新生とは、自分の力で新しくならねばならないというわけではありません。そうではなくて、イエス・キリストの復活の中に、私どもの新しい命、新生は、すでにあるのです。信仰によって、聖霊の力において、だれもが、その恵みにあずかっているのです。神の現実を生きていることを許されているのです。大切なのは、それを感謝して受け入れることです。

しかしこの私どもがいま生きること許されている新しい命、神の現実、それはまた終わりの日に決定的に与えられるものであることも忘れてはなりません。あの「四十日間」示された復活のイエスの命、それは永遠が一瞬この時間の世に輝いたものでした。そしてそれは私どもの確かな希望ともなったのです。希望とはまだないものによって生き、生かされることです。希望が成就するそのときまで、私どもは「神の力により、信仰によって守られています」。試練に悩まねばならない（六節）としても望みを失わず歩んでまいりましょう。

（二二年四月一七日 復活祭）